

## 青年期後期における恋愛行動の規定因について

—関係進展度, 恋愛意識, 性別役割の自己認知が恋愛行動の遂行度に及ぼす影響—

赤澤 淳子

本研究では, 恋愛過程において遂行される恋愛行動の規定因を明らかにすることを目的とした。研究Ⅰでは, 恋愛過程で生じるとされる恋愛行動項目を検討し, 恋愛行動を捉えることのできる尺度を作成した。分析の結果, 男女ともに「親密交際行動」・「相互理解行動」・「否定的行動」・「男性役割行動」・「女性役割行動」・「デート行動」という6つの下位尺度からなる恋愛行動尺度が構成された。研究Ⅱでは, 関係進展度, 性別役割の自己認知, 恋愛意識, 交際相手の行動が, 恋愛行動の遂行に及ぼす影響について検討した。その結果, 男性においては結婚の可能性が直接男性役割行動を高め, 女性では結婚の可能性がErosを介して間接的に女性役割行動を高めていた。また, 女性の女性役割行動が交際相手の男性の男性役割行動の遂行度を高めていた。これらの結果は, 恋愛過程において男女が遂行するとされる相補的役割の中に, 性別役割行動が含まれており, 関係進展度がそれらの遂行に影響を及ぼしていることを示唆しており, 青年期の恋愛関係においても, 固定的な性別役割分業観が影響を及ぼしている可能性が示された。さらに, 女性においては, Ludusが行動の規程因として強く影響していることから, 女性の場合その恋愛が遊び感覚であるか否かによって大きく行動が変わることが明らかになった。

キーワード: 恋愛行動, 性別役割行動, 恋愛意識, 関係進展度

### 問 題

近年の日本社会においては, 表面的には男女平等的な価値観が社会に浸透しているかに思えるが, その一方で「男は仕事, 女は家庭」という性別役割分業観が未だ根強いのも現実である。その状況は, 青年期の恋愛にも影響している可能性がある。現に, この性別役割分業観を反映するかのように, 親密な関係になった青年期男女は, 伝統的性別役割に沿った行動をとる傾向が強まると指摘したのは, 土肥(1995)である。恋愛は男女間の社会的行動であるから, 恋愛行動においても社会的に規定された性差すなわちジェンダーに依拠する差が現れると考えた土肥は, 男女一対場面での性役割行動の実行度を検討し, その結果, 「相手を家に送る」「重い荷物を持つ」等の男性的行動や, 「食事や弁当を作る」「相手の部屋を掃除する」等の女性的行動において, 実行度に性差が見られることを明らかにしている。

また, 飛田(1991)によると, 行動には, 同性との友人関係においても異性との恋愛関係においても共通に観察可能な行動と, 「性行動」のように異性との関係だけに限られたものがあるという。つまり, 親密な異性関係において, 性差の影響が示されるのである。

さらに、Murstein (1977) は、結婚に至るカップルの恋愛過程を3段階に分類し、相手の外見の魅力や行動等、相手から受ける刺激が重視される第1段階のStimulus、価値観の共有が重視される第2段階のValueに続く、第3段階すなわち恋愛過程の最終期に、相補的な役割を重視するRoleの段階が位置するという仮説を提唱している。

以上が示すのは、異性間の恋愛においては、男女ともに性別役割に沿った行動の遂行率が高まり、また結婚に至るカップルではその直前に、特にペアとして相補的な役割行動が重視されるということにほかならない。ここでいう「ペアとしての相補的な役割行動」には、例えば、「悩みを打ち明ける」に対し「悩みを聞く」、また、「食事を作る」に対し「作ってもらった食事を食べる」等様々なものがある。これらをジェンダーの視点から見ると、先の飛田が指摘するように、二者の性別に応じて行動遂行率に違いがあるものとならないものに分かれる可能性がある。「食事を作る」「作ってもらった食事を食べる」という相補的な行動は、中でも典型的な、性別役割分業観に影響された行動、つまり性別役割行動といえよう。

このような性別役割行動は、山田 (1994) が指摘するように、夫婦という単位の中での遂行率が、そうでない場合より高いと考えてよい。ただし、土肥 (1995) によれば、夫婦に限らず、親密な交際を行う結婚前のカップルにおいても、やはり性別役割行動が観察できるという。換言するならば、親密な男女一対の場面において、性別役割行動は生起しやすいのである。そして、現に、Mursteinの提唱する相補的な役割行動が性別役割行動であるとの仮説を立て、青年期の男女を対象として検証を試みた赤澤 (1998) の結果も、これを支持している。すなわち、青年期女子では、結婚を意識する恋人を持つものは、恋人を持たないものや結婚を意識しない恋人を持つものより、性別役割行動の遂行度が高いのである。

我が国では、恋愛を経て結婚する「恋愛結婚」の比率が9割を超えている。一般的には、恋愛結婚は見合い結婚と比較すると、「家や伝統という風習に拘束されず、個人の自由な選択による結婚」というイメージが強いが、生産性を重視する近代社会においては、恋愛を結婚制度に取り組み、「自由な恋愛」と「幸せな結婚」という概念の予定調和的結合により「恋愛結婚」という制度が創出されたという指摘もある(柳原, 1991)。とすると、その良否は別として、恋愛は性別役割分業に基づく夫婦を形成する前段階として位置づけられ、恋愛過程において、既に「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業体制に基づいた意識が反映した行動が選択されている可能性がある。しかし、それらを客観的なデータとして実証した研究は従前皆無であった。そこで、本研究では、性別役割行動を含む恋愛行動の規定因を明らかにしたいと考える。

まず、規定因として、関係の進展度が挙げられる。中村 (1991) は、様々な段階にある異性関係における、当事者と認知された交際相手の行動を、交際期間及び「恋人以下」か「最愛の人」かといった関係進展度別に検討した。その結果、交際期間が長くなるにつれて、「趣味や関心事について話す」等の自己開示行動や、「お金を貸す」といった供与行動が増加し、親密度の高まりに応じて、自己開示行動や「会うのに多くの時間をあてる」等の近接的行動の遂行率が高まること明らかになった。この研究結果は、交際期間や交際の親密度が、異性関係において遂行される行動の生起率に影響を及ぼすことを示唆するものである。

また、異性関係もまた一つの対人関係であることを勘案すると、行動の遂行には、相手との相互作用が関連すると考えられる。結婚に至るカップルの恋愛過程を6つの段階に分類したLewis (1973) によれば、第4段階は、二人が互助的な役割行動をとる「役割取得」の段階、第5段階はその役割がうまく適合した「役割適合」の段階、第6段階は二人がペアとして行動する「結晶」

段階になるとされている。

さらに、恋愛の感情や行動において、男女という単なる生物学的な差だけでなく、自分が男性的であるか、女性的であるかという性別役割の自己認知が影響するという指摘もある (Coleman & Ganong, 1985)。既に、性別役割行動の遂行度を高める要因としては、性別役割の自己認知の側面が影響を及ぼすことが指摘されている (Bem, 1975)。Bemによれば、自己認知において性典型者と呼ばれる男性的男性と女性的女性では、「明らかにその性にふさわしくない行動」ではなく、「ふさわしい行動」を選択するということである。つまり、自己の性差だけでなく、自分自身を「男性的である」「女性的である」と認識する意識も、恋愛行動に影響を及ぼす可能性がある。

一方、恋愛の情緒的な側面である恋愛意識も、恋愛行動に影響を及ぼす要因となる可能性がある。松井ほか (1990) は、Lee (1974, 1977) の愛情類型の理論を基盤とし作成したLETS-2を元に、エロス (Eros: 美への愛)、マニア (Mania: 狂気的な愛)、アガペ (Agape: 無償の愛)、ルダス (Ludus: 遊びの愛)、プラグマ (Pragma: 実利的愛)、ストルゲ (Storge: 友愛) の6類型を見出した。そして、恋愛行動の進行段階に応じた恋愛意識の変化について検討を加えた (松井, 1993)。その結果、たとえばロマンティックな考えや行動をとるという特徴を示すエロス (Eros) は、恋愛行動の進行にともなって高まるという傾向が示すように、行動の進展に伴い変化する恋愛意識の存在を確認している。このように、行動と意識との間には、一定の関係があることが示唆されている。

以上の先行研究から、恋愛における性別役割行動を含む恋愛行動の遂行には、関係進展度、性別役割の自己認知、恋愛意識、及び交際相手の行動等が関連している可能性がうかがわれる。本研究は、結婚前の青年期男女の恋愛過程において遂行される恋愛行動の構造を明らかにし、それらの行動を規定する要因検討を企図するが、従来の恋愛行動の構造研究においては、性別役割行動が考慮されていなかったため、まず研究Ⅰでは、性別役割行動を含めた恋愛行動項目から構成される尺度を作成し、研究Ⅱにおいて、その尺度を用いて、恋愛行動の規定因について検討する。

## 研究Ⅰ

### 目的

恋愛過程にあるカップルの間で生じると思われる恋愛行動項目を、因子分析によって検討し、性別役割行動を含む恋愛行動をとらえることのできる尺度を作成する。

### 方法

#### 1. 調査への参加者

E県所在の私立大学大学生294名、うち有効回答者数282名 (男性105名、女性177名)。調査への参加者の平均年齢は18.7歳であった。

#### 2. 調査手続き

E県所在の私立大学において、心理学担当者の協力を得て、担当講義の終わりの15分ほどを利用して頂き調査を実施した。調査の目的を説明し、「協力の意思のある人だけ協力してほしい」旨口頭で伝えた。調査票の冒頭には、調査目的を以下のように記述した。「この調査は、大学生の恋愛行動と心理との関係を知りたいと思い作成しました。回答は無記名で、調査結果はすべて

コンピュータを用いて統計的に処理します。回答された方のプライバシーが侵害されることは絶対にありませんので、ありのままを記入して下さるようお願いいたします。」説明後、協力の意志がない学生には、講義室から順次退室してもらい、その後、協力意思のある学生に調査票を配布し、記入後の調査票は講義退出時に設置した箱の中に入れてもらった。講義は、大講義室で行われる大人数の講義で、登録者は約500名で、調査票回収数294であった。

### 3. 質問紙の構成

土肥(1995)、及び松井(1990)を参考とし、恋愛過程において男女が遂行しうる行動項目を54項目設定した。そして、異性の恋人といる時、それらの行動が、男性にとってどれくらい望ましいかについて5段階で評定を求めた。同様に、女性にとっての望ましさについても、5件法で回答を求めた。

### 結果と考察

恋愛行動を尺度化するために、男性における恋愛行動項目54項目について因子分析を行った。構成項目は、いずれも恋愛行動であるため、因子間の相関関係が予測されるため、斜交プロマックス回転を用いた。その結果、6因子が抽出された(Table 1)。同様の手続きを行い、女性における恋愛行動項目についても6因子を抽出した(Table 2)。男女それぞれ6因子については、項目内容に多少の違いはあるが、質的には同じ因子が抽出されたので、因子名について同じ命名を行った。

まず、男性にふさわしい行動の第1因子には、「自分の部屋に誘う」「キスをする」「相手の肩や身体にふれる」等親密さや性的な行動を示す6項目で構成されていることから〈親密交際行動〉と命名する。第2因子は、「相手の話を聞く」「相手の悩みを聞く」「悩みをうち明ける」等、自己開示や相手に対する配慮を示す4項目から構成されているので〈相互理解行動〉とした。第3因子は、「相手をなぐる」「相手をばかにする」等望ましくない行動を示す3項目から構成されているので〈否定的行動〉とした。第4因子は、「相手をエスコートする」「重い荷物を持つ」「相手を家に送る」等、男性に期待される性別役割行動4項目から成っているので、〈男性役割行動〉と命名した。第5因子は、「デートの行き先を決める」「デートのプランを立てる」という2項目から構成されているので、〈デート行動〉と命名した。第6因子は、「相手の部屋を掃除する」「食事や弁当を作る」等、女性に期待される性別役割行動3項目から構成されているので〈女性役割行動〉とした。同様に、女性についても、第1因子は、〈相互理解行動〉、第2因子は〈男性役割行動〉、第3因子は〈女性役割行動〉、第4因子は〈親密交際行動〉、第5因子は〈否定的行動〉、第6因子を〈デート行動〉とした。今回の恋愛行動の因子分析により、これまでの恋愛行動の構造では分類されていなかった、男女に各々期待される性別役割行動が恋愛行動として含まれた。

さらに、男女それぞれの6因子モデルについてAmos 4.0を用いて確証的因子分析を行った。その結果、〈女性・相互理解行動〉については、「QF52相手をたてる」を除外することによりなお、 $\alpha$ 係数・適合度ともに上昇することからQF52を除外した。モデルの適合度は、GFI, CFI, RMSEAの3つの指標を採用した。その結果、男性にふさわしい行動についてはGFI=.900, CFI=.921, RMSEA=.053, 女性にふさわしい行動についてはGFI=.884, CFI=.940, RMSEA=.047であった。女性にふさわしい行動ではGFIが.900に達していないが、その他の値は一応基準をみたしているため、適合していると判断した。よって、以後、男女各々抽出された6因子を、恋愛行動を構成する下位尺度とした。

Table 1 男性における性別役割行動の因子分析結果 (promax回転後)

因子名と項目	因子負荷量						共通性 $h^2$
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	
<b>1. 親密行動</b>							
Q32 自分の部屋に誘う	.82	-.02	.04	.00	.06	.07	.691
Q34 キスをする	.79	.05	-.12	-.03	-.02	-.02	.664
Q27 相手の肩や身体にふれる	.78	-.01	.01	-.03	-.03	.02	.546
Q35 一緒に外泊する	.74	.06	.04	-.01	-.10	-.02	.507
Q11 ベッドに誘う	.62	-.06	.06	.16	-.11	-.12	.434
Q31 友達に紹介する	.50	.01	-.02	-.04	.28	.12	.445
<b>2. 相互理解行動</b>							
Q19 相手の話を聞く	-.04	.90	-.02	.01	-.10	.02	.757
Q15 相手の悩みを聴く	.02	.79	.07	.02	-.04	.07	.587
Q24 悩みをうち明ける	.08	.68	.11	-.03	.12	-.13	.542
Q17 相手のことを思いやる	.01	.61	-.24	-.03	.10	.01	.601
<b>3. 否定的行動</b>							
Q38 相手をなぐる	-.12	.08	.71	.00	.05	.08	.477
Q53 相手をばかにする	.05	-.01	.68	.01	-.01	.00	.469
Q26 約束を破る	.10	-.06	.65	-.06	.01	-.07	.484
<b>4. 男性役割行動</b>							
Q7 相手をエスコートする	.02	-.02	-.03	.71	.00	-.01	.517
Q3 重い荷物を持つ	-.01	.05	.05	.62	-.07	.02	.357
Q1 相手を家に送る	.03	-.07	-.10	.54	.05	.05	.347
Q49 こわれた道具を修理する	.02	.04	.01	.42	.21	-.07	.315
<b>5. デート行動</b>							
Q28 デートの行き先を決める	.04	.00	.03	-.02	.79	-.03	.646
Q16 デートのプランを立てる	-.09	-.01	.01	.05	.65	.01	.383
<b>6. 女性役割行動</b>							
Q4 相手の部屋をそうじする	.03	-.16	.02	-.01	.02	.65	.417
Q2 食事や弁当をつくる	.02	.02	-.06	-.06	-.01	.58	.340
Q6 こまやかな世話をする	-.03	.20	.09	.12	-.05	.51	.338
累積寄与率 (%)	22.97	32.79	38.57	43.52	46.63	49.37	
信頼性係数 ( $\alpha$ )	.861	.843	.715	.686	.673	.591	
因子間相関		因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	
1. 親密行動		.362	-.067	.412	.538	-.227	
2. 相互理解行動			-.401	.308	.446	.075	
3. 否定的行動				-.344	-.253	.045	
4. 男性役割行動					.363	.010	
5. デート行動						-.137	

## 研究 II

### 目的

研究 II では, 研究 I で作成した尺度をもとに, 関係進展度, 性別役割の自己認知, 恋愛意識, 交際相手の行動が, 恋愛行動の遂行に及ぼす影響について明らかにする (Figure 1).

### 方法

#### 1. 調査への参加者

調査への参加者は, E 県内の大学生及び未婚の男女社会人であった. 調査票配布数は約 600, 回収数は 385, 有効回答数は 364 であった. 本研究では, 恋人ないし婚約者のいる 163 名 (男性 78 名,

Table 2 女性における性別役割行動の因子分析結果 (promax回転後)

因子名と項目	因子負荷量						共通性 $h^2$
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	
<b>1. 相互理解行動</b>							
QF19 相手の話をきく	.94	.03	-.11	-.13	-.03	.12	.784
QF15 相手の悩みを聞く	.77	.01	.06	-.04	.03	.02	.614
QF22 自分のことについて話す	.73	-.03	-.04	.07	.06	.22	.597
QF24 悩みを打ち明ける	.72	-.07	-.08	.00	-.03	.19	.572
QF17 相手のことを思いやる	.70	-.05	.09	-.07	-.06	.01	.617
QF48 相手の服や趣味をほめる	.51	.08	.09	.16	-.03	-.21	.397
QF52 相手をたてる	.43	.08	.21	.17	-.02	-.32	.447
<b>2. 男性役割行動</b>							
QF3 重い荷物を持つ	.14	.71	-.14	-.02	.12	-.09	.581
QF9 並んで歩くとき車道側	.05	.67	.01	-.03	.09	-.14	.447
QF1 相手を家に送る	-.12	.63	.02	-.03	-.06	.01	.418
QF7 相手をエスコートする	-.11	.63	.03	.04	.00	.19	.533
QF49 こわれた道具を修理する	.08	.62	-.11	-.09	-.11	.05	.425
QF10 車の運転をする	.01	.62	.18	-.02	-.02	.03	.320
QF5 プロボースする	-.11	.60	.06	.10	-.06	.23	.483
<b>3. 女性役割行動</b>							
QF2 食事や弁当をつくる	-.12	-.07	.81	-.07	-.04	.16	.588
QF4 相手の部屋をそうじする	-.05	.06	.79	.00	.13	.01	.524
QF6 こまやかな世話をする	.04	.15	.75	-.01	-.07	-.11	.550
QF8 手紙を書く	.20	-.11	.55	-.01	.05	.02	.517
QF39 お茶やコーヒーをいれる	.22	-.12	.51	.01	-.07	.01	.577
<b>4. 親密行動</b>							
QF35 一緒に外泊する	.01	-.09	-.12	.87	.03	-.03	.691
QF32 自分の部屋に誘う	-.04	.06	-.01	.75	.01	.01	.549
QF34 キスをする	-.07	-.06	.00	.71	-.17	.09	.548
QF27 相手の肩や身体にふれる	.03	.02	.09	.58	.13	.10	.440
<b>5. 否定的行動</b>							
QF26 約束を破る	-.03	-.09	.00	.00	.78	.02	.587
QF53 相手をばかにする	-.08	-.01	.11	-.02	.73	.06	.554
QF38 相手をなぐる	.04	.09	-.08	.03	.58	-.02	.391
<b>6. デート行動</b>							
QF16 デートのプランを立てる	.13	.05	.00	.02	.04	.64	.475
QF28 デートの行き先を決める	.18	.10	.06	.14	.01	.55	.486
累積寄与率 (%)	24.22	35.91	42.54	47.15	50.25	52.55	
信頼性係数 ( $\alpha$ )	.879	.834	.840	.818	.745	.674	
因子間相関		因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	
1. 相互理解行動		-.291	.596	.309	-.481	.134	
2. 男性役割行動			-.435	.035	.340	.254	
3. 女性役割行動				.330	-.241	.054	
4. 親密行動					.047	.272	
5. 否定的行動						.007	

女性85名)を分析対象とした。カップル単位のペアデータを得ることができたのは78組であり、男性の平均年齢は22.7歳、女性の平均年齢は21.2歳であった。

## 2. 調査手続き

まず、学生については筆者担当の講義終了10~15分前に実施した。調査目的について説明し、調査票配布前に口頭で、「協力の意思のある方のみ、協力してほしい。回答したくない人は、もちろん回答しなくても良い。当然ながら、回答の意思や有無は成績評価等には一切無関係である。」ということ、「恋人がいる人は、調査票・封筒を二部取り、一部を恋人に渡し、別々に記入し、個々封筒に入れて提出してもらいたい。しかし、カップルであることが分かるように、記号の所に共

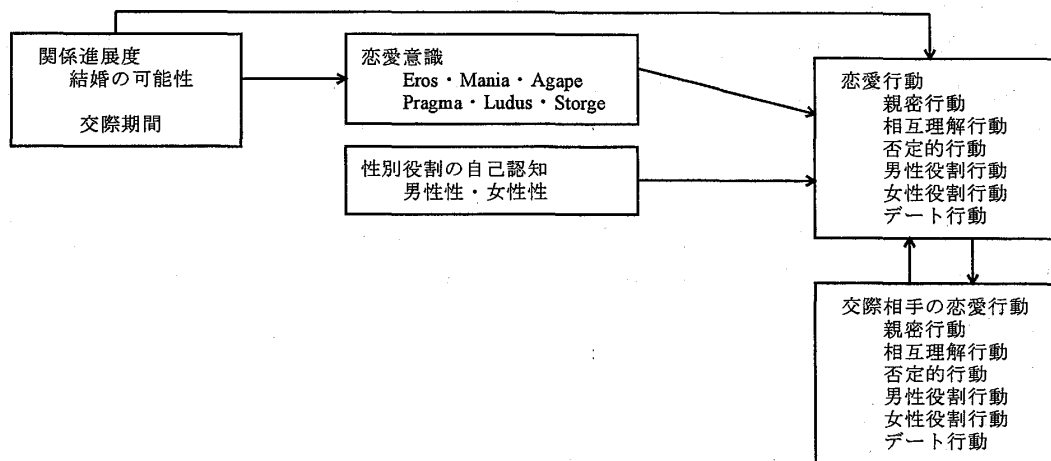


Figure 1 本研究における恋愛行動を規定する仮説モデル

通の暗号を入れてほしい。」と説明した。また、調査票の冒頭には調査目的を以下のように記載した。「この調査は、大学生の恋愛行動と心理との関係を知りたいと思い作成しました。回答は無記名で、調査結果はすべてコンピュータを用いて統計的に処理します。回答された方のプライバシーが侵害されることは絶対にありませんので、ありのままを記入してくださいをお願いします。尚、カップルで記入される場合には、相談したりしないようにお願いします。また、記入漏れのないように、全問にお答えくださるようお願いします。」担当講義内での調査票配布ということで、学生には多少プレッシャーがかかると思われたので、プライバシーの保護ということも勘案し、その場では回収せず、後日各々封筒に入れ設置した箱に投函してもらうよう指示した。よって、協力意思のない者でも、その場では調査票を持ち帰り、後に破棄するという選択が可能であった。

社会人については、結婚式場の担当者に依頼した。式場に相談に来たカップルに式場の担当職員から調査目的を説明してもらい、その上で、協力意思のある者のみに調査票を配布してもらった。調査票の表紙には以下のように表記した。「この調査は、結婚直前のカップルの恋愛期間における恋愛行動と心理との関係を知りたいと思い作成しました。この研究は、文部省から交付された科学研究費助成金により実施されているものであり、当結婚式場とは一切関係ありません。回答は無記名で、調査結果はすべてコンピュータを用いて統計的に処理します。回答された方のプライバシーが侵害されることは絶対ありませんので、ありのままを記入してくださいをお願いします。また、記入漏れのないように、全問にお答えくださいようお願いします。」プライバシーの保護のため、調査票は各自持ち帰り、返送用の封筒にて、郵送で著者に返送されるようにした。

### 3. 調査内容

#### (1) 関係進展度

関係進展度については、交際期間、結婚の可能性という2つの項目を設定した。

##### ①交際期間

相手との交際期間について日数で回答を求めた。

##### ②結婚の可能性

相手との結婚の可能性について、パーセントで回答させた。

(2) 性別役割の自己認知

安達ほか (1985) が作成した日本版BSRI (Bem's Sex Role Inventory) から、男性性尺度20項目、女性性尺度20項目を用いた。各項目について、その特性が自分自身にどの程度妥当するかを「非常に当てはまる (7点)」から「非常に当てはまらない (1点)」の7件法で回答を求めた。

(3) 恋愛意識

松井ほか (1990) が、Lee (1974, 1977) の愛情類型の理論を基盤とし作成したLETS-2を元に、Eros・Mania・Agape・Ludus・Pragma・Storge (Table 3) について各6項目ずつ、全36項目の尺度を用いた。調査では、「よくあてはまる」(5点) から「全くあてはまらない」(1点) の5件法を用いた。

(4) 恋愛行動の遂行度

研究Iで作成された恋愛行動を構成する尺度を用いて恋愛行動の遂行度を調査した。男性の第1尺度から第6尺度を構成する各項目については男性に、同様に女性の第1尺度から第6尺度については女性に対して、好意を持っている異性と二人でいるときに、それらの行動をどの程度実行するかについて評定を求めた。調査では、「行う」(5点)、「しばしば行う」(4点)、「時々行う」(3点)、「めったに行わない」(2点)、「行わない」(1点) の5件法を用いた。尚、各尺度を構成する項目の粗得点の合計得点を各行動の遂行度として使用することとした。

結果と考察

1. 関係進展度、恋愛意識、性別役割の自己認知と恋愛行動

まず男女別に関係進展度、恋愛意識、性別役割の自己認知、恋愛行動の各変数間におけるピアソンの相関係数をTable4に、また各変数の男女別の平均値をTable5に示した。引き続き、恋愛行動の規定因を検討するために、Figure 1のモデルにそって、関係進展度、恋愛意識、性別役割の自己認知と恋愛行動の関係を検討するためにAmos 4を用いてパス解析を試みた。順次有意でないパスを削除し、最終的に有意なパスのみとなった結果を示したものが、Figure 2及びFigure 3のパス・ダイアグラムである。

①関係進展度と恋愛意識及び恋愛行動との関係

男性における関係進展度と恋愛行動との関係は、唯一結婚の可能性から男性役割行動への直接のパスが有意となっており、結婚の可能性が高まるとともに、自己の性にふさわしい性別役割行動の遂行度が増えることが分かる。また、関係進展度と恋愛意識との関係では、結婚の可能性が、ErosやManiaを高め、友情的な愛であるStorgeを低めている。これらの結果は先行研究の結果(松井, 1993)と一致している。また、交際期間が長くなるにつれて、相手の条件等を考慮するPragmaは低くなっている。

Table 3 恋愛意識における各類型の特徴(中村(1991)および松井(1993)を参考にして作成)

名 称	特 徴
Eros (美への愛)	恋愛を至上のものとして考え、相手の外見が重視される
Mania (狂気的な愛)	独占欲、嫉妬などの激しい感情を伴う
Agape (無償の愛)	相手のために自己犠牲も厭わない
Ludus (遊びの愛)	恋愛をゲームとして捉え、遊びとして相手と関わる
Pragma (実利的愛)	恋愛を地位の上昇などの手段と考え、相手の条件を吟味する
Storge (友愛)	穏やかな友情的な愛



一方、女性では、関係進展度と恋愛行動の関係では、交際期間から男性役割行動、否定的行動への直接のパスが有意となっている。交際期間が長くなると、女性では異性関係において男性役割行動や否定的な行動の遂行度が高まるようである。この結果は、女性は交際初期において、交際を継続するために、伝統的な性別役割に反するような行動や望ましくない行動を抑制している可能性をうかがわせる。また、関係進展度と恋愛意識との関係では、結婚の可能性からEros, Agape, Ludusへのパスが有意となっている。女性では男性と同様に、結婚の可能性が高まるとともにロマンティックな恋愛意識 (Eros) や愛他的な恋愛意識 (Agape) が高まり、恋愛をゲームのように楽しもうという恋愛意識 (Ludus) は低くなる。これらの傾向は、松井 (1993) の結果と

Table 4 関係進展度、性別役割の自己認知、恋愛意識、性別役割行動の相関係数

↓ (女性)	→ (男性)		性別役割の自己認知		恋愛意識					性別役割行動						
	関係進展度	結婚の可能性	男性性	女性性	Eros	Mania	Agape	Ludus	Pragma	Storge	親密行動	相互理解行動	否定的行動	男性役割行動	女性役割行動	デート行動
関係進展度																
交際期間	.121	-.100	-.099	.076	-.020	-.086	.027	-.252*	-.098	.080	.009	.035	.048	.052	-.107	
結婚の可能性	.175	.197	.049	.527***	.253*	.217	-.346**	-.188	-.234*	.290*	.233*	-.232*	.325**	.229*	.256*	
性別役割の自己認知																
男性性	.085	.073	.288	.198	.071	.133	-.235*	.145	-.255*	.164	.246*	-.189	.483***	.327**	.295**	
女性性	.005	.109	.573	.116	-.021	.205	-.087	-.001	.047	.064	.200	-.288*	.173	.031	.106	
恋愛意識																
Eros	.205	.479***	.124	.356**	.429***	.466***	-.375**	-.366**	-.169	.358**	.406***	-.292*	.285*	.327**	.316**	
Mania	-.053	.084	-.084	.147	.294**	.454***	-.061	-.056	-.105	.273*	.093	.040	.125	.386***	.129	
Agape	-.102	.273	.159	.455***	.494***	.551***	-.258*	-.135	.080	.094	.332**	-.145	.099	.201	.075	
Ludus	-.097	-.325**	.109	-.135	-.261*	-.159	-.301**	.417***	.100	-.225*	-.212	.251*	-.195	-.023	-.199	
Pragma	-.055	-.070	.074	-.057	-.021	-.062	-.202	.452***	.206	-.029	-.054	.307**	.131	.096	.133	
Storge	-.152	-.489***	-.066	.063	-.230*	.140	.011	.418***	.175	-.167	.118	.181	-.153	-.008	-.240*	
性別役割行動																
親密行動	.105	.318**	-.108	-.097	.287**	.126	-.034	-.355**	.033	-.308**	.343**	.007	.295**	.180	.257*	
相互理解行動	.120	.183	.040	.317**	.396***	.315**	.421***	-.482***	-.339**	-.066	.356**	-.246*	.389**	.197	.291**	
否定的行動	.247*	.211	.058	-.009	-.062	-.188	-.370***	.036	.145	-.107	.205	-.118	-.188	-.086	-.249*	
男性役割行動	.296**	.326**	.284**	.265*	.331**	.107	.192	-.067	.165	-.074	.310**	.182	.346**	.422***	.334**	
女性役割行動	.187	.227*	.079	.171	.360***	.104	.244*	-.319**	-.168	-.139	.430***	.440***	.094	.343**	.342**	
デート行動	.161	.123	-.012	.023	.150	.124	.047	-.276*	-.137	-.001	.285	.454***	.157	.219*	.134	

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

Table 5 研究IIで用いた変数の平均値と標準偏差

変数名	男性		女性	
	M	SD	M	SD
結婚の可能性 (%)	76.03	32.99	73.58	35.59
交際期間 (日)	538.98	488.95	540.02	525.27
Eros	23.41	3.74	23.04	4.20
Mania	22.00	4.91	23.04	5.37
Agape	21.26	4.65	20.80	5.55
Ludus	12.83	3.84	13.14	4.75
Pragma	13.58	4.53	15.93	4.47
Storge	18.19	4.70	19.26	5.50
男性性	93.21	18.63	86.44	21.12
女性性	97.35	16.63	98.58	16.11
親密行動	3.78	0.81	3.64	1.01
相互理解行動	4.05	0.69	4.08	0.65
否定的行動	1.88	0.65	2.28	0.98
男性役割行動	3.73	0.82	2.07	0.74
女性役割行動	2.12	0.75	3.25	0.90
デート行動	3.33	1.07	3.38	1.12

注. 恋愛行動については、分析時には各尺度を構成する項目の粗得点の合計得点を用いているが、本表の平均値については、尺度を構成する項目の平均値を表示した。

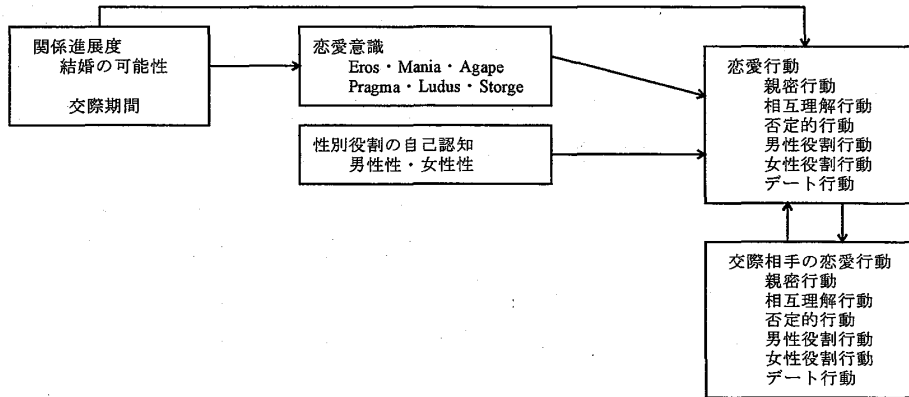


Figure 1 本研究における恋愛行動を規定する仮説モデル

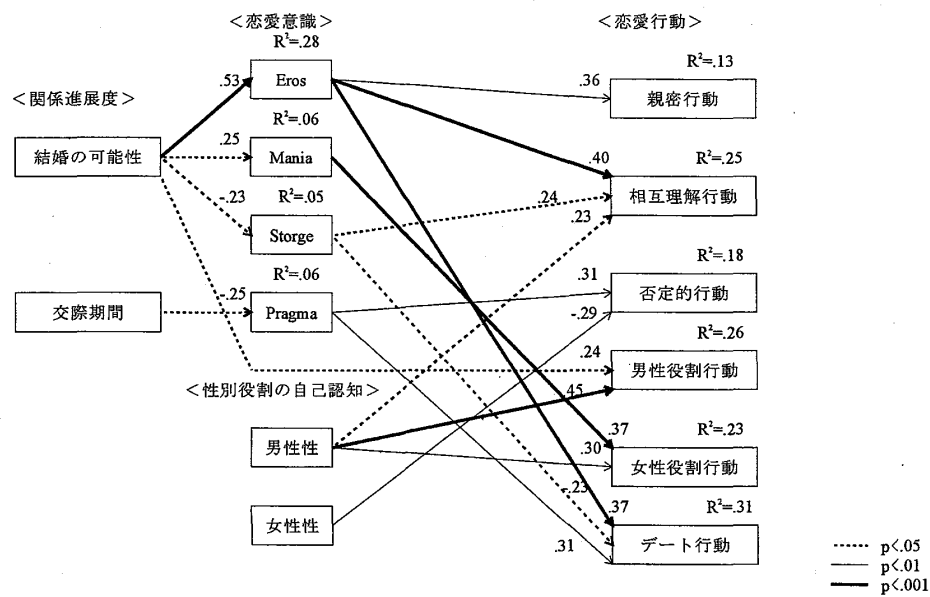


Figure 2 男性における関係進展度・恋愛意識・性別役割の自己認知が恋愛行動に及ぼす影響のパス・ダイアグラム (有意な標準偏回帰係数のみ表示した)

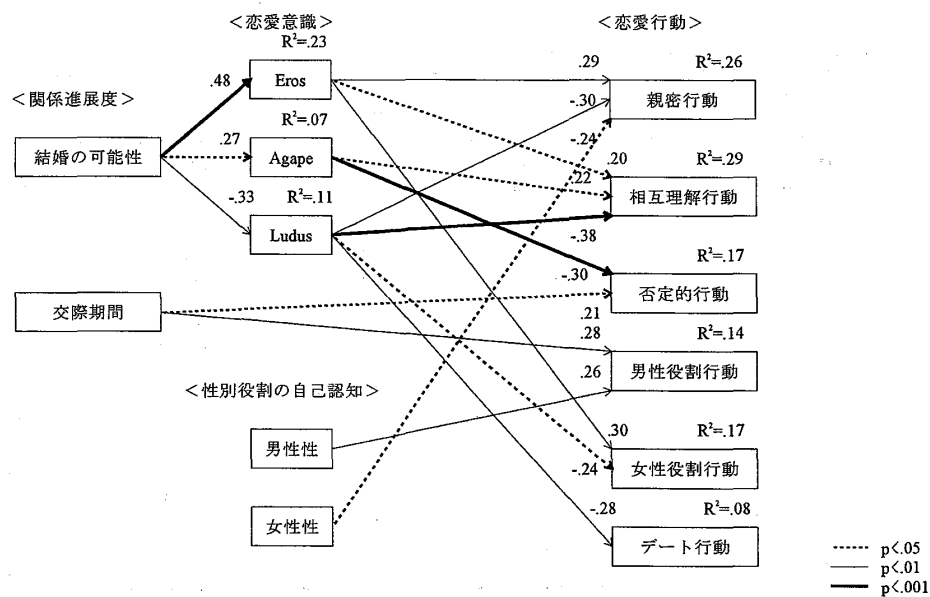


Figure 3 女性における関係進展度・恋愛意識・性別役割の自己認知が恋愛行動に及ぼす影響のパス・ダイアグラム (有意な標準偏回帰係数のみ表示した)

一致している。

男女ともに、結婚の可能性が高くなると、様々な恋愛意識が高まることが明らかになった。Erosについては男女ともに共通していたが、その他の恋愛意識については、男女で高まる恋愛意識の内容に違いが見られた。結婚の可能性の上昇とともに高まる恋愛意識は、男性ではErosとManiaで、女性ではErosとAgapeであった。松井(1993)は、Eros, Mania, Agapeは基本的な恋愛意識であり、他の3つは特殊な恋愛意識であると指摘している。これに照らせば、恋愛過程においては、結婚の可能性が高まるとともに、基本的な恋愛意識は高まり、それ以外の特殊な恋愛意識は低下するといえよう。

### ②恋愛意識と恋愛行動との関係

男女ともに、関係進展度によって変化する恋愛意識が、恋愛行動の遂行度に影響を及ぼしている。まず、男性では、Erosから親密交際行動、相互理解行動、デート行動に、Maniaから女性役割行動に、Pragmaが否定的行動、デート行動に、Storgeから相互理解行動、デート行動に有意なパスが示された。男性では、恋愛を至上のものと考え、相手の身体や外見を重視するという恋愛意識(Eros)が、行動の遂行度に強く影響している。恋愛関係の維持にErosが重要な役割を果たしており(Hendrickら, 1988)、恋愛段階が上がるほどEros得点は高まることが指摘されている(松井, 1993)。すなわち、男性においては、強い恋愛感情であるErosの高まりが、交際相手の女性に対する様々な恋愛行動を生起させる原動力となっている可能性がある。また、男性では、交際相手への独占欲が高まると(Mania)、相手の部屋を掃除するといった女性的な性別役割行動の遂行度が高まっている。そして、相手の条件を考慮する恋愛意識(Pragma)が高まると、否定的な行動も高まることが分かった。さらに、男性では、Erosだけでなく、Erosとは異なる友愛的意識(Storge)が高まることによっても相互理解行動の遂行度が上昇することから、相互理解行動は恋愛関係だけでなく、友人関係においても生起しやすい行動であるといえよう。

一方、女性においては、Erosから相互理解行動、親密交際行動、女性役割行動に、Agapeから相互理解行動、否定的行動に、Ludusから相互理解行動、親密交際行動、女性役割行動、デート行動に有意なパスが認められた。女性では、遊び感覚で交際するという恋愛意識(Ludus)が強くなると、相互理解行動、親密交際行動、女性役割行動、デート行動の実行は抑制される。また、女性では、相手のためならば自己犠牲も厭わないという恋愛意識(Agape)が、相互理解行動の遂行を高め、否定的行動の遂行を低めている。女性においても、男性と同様にErosが恋愛行動の生起率を高めているが、それ以上にLudusが行動の規定因として強い影響を及ぼしている。女性では、その恋愛が遊び感覚であるか否かによって、大きく行動が変わることが示された。

### ③性別役割の自己認知と恋愛行動との関係

男性では、男性性から相互理解行動、男性役割行動、女性役割行動への、また女性性から否定的行動への有意なパスが示された。つまり、男性では女性性より男性性の高さが、様々な行動の遂行度を高めることに強く影響していることが分かる。また、女性性が低い男性では、否定的な行動の遂行度が高まるという興味深い結果が示された。Bem(1974)は、精神的に健康な人間像として、男性性と女性性を併せ持つアンドロジニーを提唱しているが、男性が女性性を高めることにより、否定的な行動の遂行度が低下するという今回の結果から、男性においても男性性だけでなく女性性を併せ持つことの重要性が示唆されたといえよう。

女性では、男性性が男性役割行動の遂行度を高め、女性性が親密交際行動の遂行度を低めている。女性性の高い女性では、性的な要素の強い親密交際行動は抑制されることが示唆された。

## 2. 交際相手の恋愛行動の影響

男女の恋愛行動の規定因を検討するために、交際相手の恋愛行動を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った結果をFigure 4に示した。

まず、男性では、交際相手の女性の親密交際行動と女性役割行動が、親密交際行動の規定因となっていた。すなわち、男性は、交際相手の女性が親密交際行動や女性役割行動を遂行するほど、親密交際行動の実行度を高める。また、交際相手の女性の女性役割行動が男性の男性役割行動の規定因として選択されたことから、女性の性別役割行動が、男性の性別役割行動の遂行度を高める要因となっていることが明らかとなった。

交際相手の女性が、「食事を作る」等の女性役割行動を遂行すると、親密交際行動や男性役割行動の遂行率が高めていた。特に、女性の女性役割行動が、男性の男性役割行動を高めるという結果は、カップルにおいて相補的な行動を遂行するといったLewis (1973) やMurstein (1977) 等の研究結果とも一致する。また、Skrypnik & Snyder (1982) の男女のペア実験では、男性は相手が女性であると、男性であることをアピールするような行動を取り始めることが指摘されているが、今回、恋愛行動の遂行率の結果においても、同様の傾向が示されたといえよう。そして、この結果は、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業の構図とも一致している。

一方、女性では、交際相手の男性の親密交際行動が、親密交際行動、相互理解行動、男性役割行動、女性役割行動の規定因となっていた。交際相手の男性が、積極的に自分の部屋に誘ったり、キスをしたりという非常に親密な行動をとると、女性は類似した親密交際行動のみならず、その他の様々な恋愛行動の遂行度を高めることが明らかになった。また、男性の否定的行動が、女性の女性役割行動の規定因として選択された。つまり、男性の「相手をなぐる」、「相手をばかにする」という否定的行動が、女性の「食事や弁当を作る」、「相手の部屋を掃除する」といった献身的な女性役割行動の遂行度を高めるということである。

女性の様々な恋愛行動は、男性の親密交際行動によって遂行度が高くなっている。男性側の親密交際行動の増加は、二人の関係はかなり親密になっているという指標となり、女性の恋愛行動の遂行度を高めている可能性がある。また、否定的行動が女性役割行動の遂行度を高めるという結果は、男女の関係が支配-服従関係になる危険性を孕んでいる。

また、男女ともに親密交際行動が高まると、交際相手の親密交際行動も高まっている。Rands & Levinger (1979) は、相手が異性で、かつ対人関係が親密になるに従って、「手を握る」等の身体接触行動が生じやすくなると指摘しており、今回の結果と適合している。

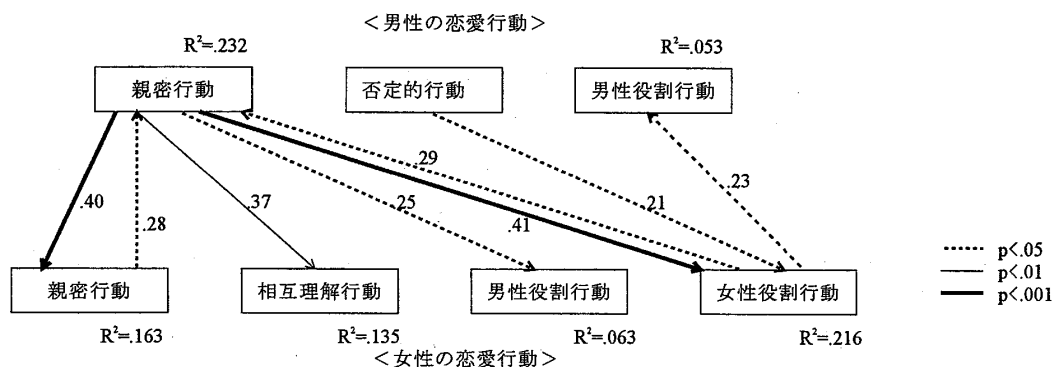


Figure 4 カップルにおける恋愛行動の相互作用

Table 6 男性の恋愛行動を予測する女性の恋愛行動

	R <sup>2</sup>	F	親密交際	相互理解	(女性の恋愛行動)			デート
					否定的	男性役割	女性役割	
(男性の恋愛行動)								
親密交際	.232	15.60***	.276*	.183	.129	.043	.293*	.068
相互理解	—							
否定的	—							
男性役割	.053	4.28*	.074	-.023	.056	-.003	.231*	-.083
女性役割	—							
デート	—							

注. \*p<.05; \*\*\*p<.001

Table 7 女性の恋愛行動を予測する男性の恋愛行動

	R <sup>2</sup>	F	親密交際	相互理解	(男性の恋愛行動)			デート
					否定的	男性役割	女性役割	
(女性の恋愛行動)								
親密交際	.163	14.75***	.403***	-.029	.108	.046	-.004*	-.117
相互理解	.135	11.84**	.367**	-.005	.148	-.026	-.126	-.098
否定的	—							
男性役割	.063	5.09*	.251*	-.076	.211	.015	.182	.104
女性役割	.216	10.35***	.411***	-.167	.214	.171	.091	.014
デート	—							

注. \*p<.05; \*\*p<.01; \*\*\*p<.001

## 全体的考察

本研究では、恋愛過程において展開される恋愛行動に関して、性別役割行動を含めた尺度を作成し、それをを用いて、カップルにおける恋愛行動を遂行する規定因について検討した。

まず、研究Ⅰでは、ジェンダーの視点を考慮に入れた恋愛行動項目から成る尺度が構成され、男女共に〈親密交際行動〉〈相互理解行動〉〈否定的行動〉〈男性役割行動〉〈女性役割行動〉〈デート行動〉という6つの下位尺度からなる恋愛行動尺度が構成された。このうちの〈親密交際行動〉〈相互理解行動〉〈否定的行動〉〈デート行動〉に関しては、これまでの恋愛行動の構造検討においても、同様の行動が看取されている(松井, 1990; 飛田, 1991)。しかし、〈男性役割行動〉〈女性役割行動〉という性別役割行動については、今回初めて構造の中に含まれた。

次に、研究Ⅱでは、構成された尺度を用いて、恋人を持つ男女を対象として、性別役割行動を含む恋愛行動の遂行を規定する要因について検討した。その結果、まず進展度と恋愛行動との関係では、男性では、結婚の可能性が高まると、交際相手の女性といる時に、男性役割行動の遂行度を高めることが分かった。Murstein (1977) によれば、結婚に至るカップルでは、その最終段階に相補的な役割を重視する時期が位置するが、今回の結果は、男性の場合に相補的な役割として男性役割行動が遂行される可能性があることを示唆するものである。

さらに、今回の結果では、恋愛意識が恋愛行動の遂行度に影響を及ぼすことが明らかになった。つまり、結婚の可能性が直接行動に作用するのではなく、結婚の可能性が恋愛意識に影響を及ぼし、さらに恋愛意識が恋愛行動の遂行度に影響を及ぼすという関係である。Rands & Levinger (1979) は、対人関係の親密さにおいて、行動的側面と情緒的側面があることを示唆したが、今回の結果から、恋愛関係における行動的側面と情緒的側面の関連が明確に示されたと言えよう。

恋愛意識の中でも、Erosは男女に共通して恋愛行動の規定因となっていた。しかし、数値を見

ると、特に男性ではErosが、女性ではLudusが特に行動の遂行度に強く影響しており、類似した行動でも、それらを規定する感情は男女で異なることが明らかとなった。松井(1990)は、男女で恋愛意識の高まり方が異なるという仮説を提唱している。その仮説とは、男性は初期から交際相手に対してロマンティックな感情(Eros)を抱いているが、女性ではキスが終わって恋人として周囲の人に相手を紹介するようになって初めてErosが高まるというものである。女性が恋愛の初期や中期において、男性よりコミット(関与)を低めているという理由として、松井は二者関係の主導権を握るための意図的な戦略によるという説が有力としている。しかし、他にも交際の進展に対して、女性は男性より慎重である等の説もある。これらの見解は、男性においてはErosが様々な恋愛行動の規定因となり、女性では、遊びの愛(Ludus)であると認識しているうちは、恋愛行動の実行度も高めないという今回の分析結果とも適合しているといえる。

飯野(1984)は、性別役割を自己概念、認知、行動という3側面に分類している。このうち自己概念的側面とは、性役割に照らして自分自身がどの程度女性(男性)的か、に関わる自己評価である。また、認知的側面とは、性別役割がどうあるべきかという価値観や好みである。行動的側面とは、現実はどう行動するかという実行面である。これらの3側面は互いに無関係であるという説(Lynn, 1959)もある一方で、逆に密接に関係するという報告もある(Bem, 1975; 福井・赤澤, 1995)。今回の結果においても、男女ともに男性性は男性役割行動を高めているが、女性性と女性役割行動との関連は見られなかった。土肥(1995)は、恋愛関係においては、「個人としての自己概念」ではなく、「男女一対としての自己概念」が影響するとし、恋愛行動の実行等においては、性別役割の自己認知では捉えにくい旨指摘している。今後、この点については更にカップルの組み合わせ等を考慮に入れ検討をしていく必要がある。

さらに、本研究では、カップルを対象として、恋愛行動における交際相手の行動の影響について検討した結果、男性の親密交際行動が女性の様々な恋愛行動の遂行度を高めることが明らかになった。親密交際行動は、Rands & Levinger(1979)及び飛田(1991)が指摘するように、親密な異性との恋愛関係にだけ見られる行動といえよう。つまり、親密交際行動の遂行は、二人の関係の親密度を測る指標であり、女性はそれを参考に自己の行動の遂行を高めている可能性が窺われる。一方、女性の女性役割行動は、男性の親密交際行動や男性役割行動の遂行度を高めていた。近年、高校生における性行動や性意識の性差が縮まっているが、性行動における主導権は依然として男子にあることが指摘されている(上瀬, 1998)。つまり、性行動を含む親密交際行動も男性役割行動と同様に、その遂行は女性より男性に期待されていると言える。したがって、女性の女性的役割行動は、男性に期待される男性役割行動の遂行率を高めるという今回の結果は、相補的な役割関係の構築といえるのではないか。

以上、青年期後期における恋愛行動の規定因について検討した結果、結婚を意識するようになると女性ではLudus(遊びの愛)が親密交際行動を抑制し、女性性が高まると親密交際行動が抑制される等、伝統的な側面がうかがわれた。また、女性が女性別役割行動を遂行すると男性が男性役割行動の遂行率を高めることから、Murstein(1977)らが指摘する「結婚に至るカップルにおいて恋愛過程の最終期に相補的な役割を遂行する」という役割の中に、性別役割行動が含まれていることも示唆された。すなわち、青年期の恋愛関係においても、「男は仕事、女は家庭」という固定的な性別役割分業観が影響を及ぼしている可能性があるのである。

ところで、今回の分析では、対象者が少なかったため、カップルを進行段階に応じて分類することができなかったが、進行段階に応じて行動が変化することを考慮に入れると、進行段階に応

じて, 規定因も異なってくる可能性がある。したがって, 今後は進行過程も視野に入れた縦断的研究, 進行段階の異なるカップルを対象とした横断的研究が必要である。

## 引用文献

- 安達圭一郎・上地安昭・浅川潔司「男性性・女性性・心理的両性性に関する研究 ((特))」『日本教育心理学会第27回総会発表論文集』484-485, 1985.
- 赤澤淳子「恋愛後期における性別役割行動の研究」『今治明德短期大学研究紀要』22, 47-63, 1998.
- Bem, S.L. Sex role adaptability : One consequence of psychological androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 634-643, 1975.
- Coleman, M. & Ganong, L.H. Love and sex role stereotypes : Do macho men and feminine women make better lovers? *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 170-176, 1985.
- 土肥伊都子「性役割分担志向性・実行度及び愛情・好意度に及ぼす性別とジェンダー・パーソナリティの影響」『関西学院大学社会学部紀要』73, 97-107, 1995.
- 福井康之・赤澤淳子「青年期男女における性別役割の3側面間の研究」『愛媛大学教育学部紀要』42, 13-20, 1995.
- Hendrick, S.S., Hendrick, C. & Adler, N.L. Romantic relations : Love, satisfaction, and staying together. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 980-988, 1988.
- 飛田操「青年期の恋愛行動の進展について」『福島大学教育学部紀要』46, 47-55, 1991.
- 飯野晴美「『性役割』という概念の多面性について」『心理学評論』27, 158-171, 1984.
- 上瀬由美子「異性交際の深まり (高校生)」『現代のエスプリ:恋愛の心理』368, 40-51, 1998.
- Lee, J.A. *The style of loving*. *Psychology Today*, 43-51, 1974.
- Lee, J.A. A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 3, 173-182, 1977.
- Lewis, R.A. A longitudinal test of a developmental framework for premarital dyadic formation. *Journal of Marriage and the Family*, 35, 16-25, 1973.
- Lynn, D.B. A note on sex differences in the development of masculine and feminine identification. *Psychological Review*, 66, 126-135, 1959.
- 松井豊「青年の恋愛行動の構造」『心理学評論』33, 355-370, 1990.
- 松井豊「恋愛行動の段階と恋愛意識」『心理学研究』64, 335-342, 1993.
- 松井豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美「青年の恋愛に関する測定尺度の作成」『東京都立立川短期大学紀要』23, 13-23, 1990.
- Murstein, B.J. *The stimulus-value-role (SVR) theory of dyadic relationship*. In Duck, S. (Ed.), *Theory and Practice in Interpersonal Attraction* (pp. 105-127). New York : Academic Press, 1977.
- 中村雅彦「大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究」『実験社会心理学研究』31, 132-146, 1991.
- Rands, M. & Levinger, G. Implicit theories of relationship : An intergenerational study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 645-661, 1979.
- Skrypnik, B.J. & Snyder, M. On the self-perpetuating nature of stereotypes about men and women. *Journal of Experimental Social Psychology*, 18, 277-291, 1982.
- 山田昌弘『近代家族のゆくえ』東京:新曜社, 1994.
- 柳原佳子「男と女のラビリンス-家族と結婚と性」中野秀一郎(編)『ソシオロジー事始め』(pp. 52-53) 東京:有斐閣, 1991.